The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Annette Lareau, Unequal Childhoods : Class, Race and Family Life, Univ, of California Press 2003
Author(s)	秋山, 高範
Citation	年報人間科学. 2006, 27, p. 153-158
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25876
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Annette Lareau
Unequal Childhoods: Class, Race and Family Life

Univ. of California Press 2003

秋山高範

文化的再生産論の主要な論者であったブルデュー、バーンスティンが世を去ってから早数年が過ぎた。彼らの仕事は、世代間の階級格差がどのようにして維持され、再生産されていくのかを明らかにしようとするものであったといってよいだろう。ブルデューはハビトゥス概念を用い、バーンスティンはコード理論を用いることで、文化的再生産がどのようにして行われているのかを考える糸口を与えてくれた。双方、言語資本の問題について注目し、分析を行ったが、実際的な場面における言語資本の伝達について経験的に明らかにしたとはいいがたい。柴野昌山は「階層的差異をおびたハビトゥスが、スクーリングやしつけという教授的社会化行為または実際的行為 (pratique) を通して形成されるのは明白である。だが、再生産論はその微視的メカニズムについては何も述べない」と、ブルデュー理論の経験的分析の欠如を指摘している[i]。同様にバーンスティンの理論については、小内透は「理論を裏付けるための実証研究が欠如しているという問題を指摘しておく必要があろう」と述べている[ii]。

ここで紹介する *Unequal Childhoods* は、実際に子どもの家庭に入り込み、著者が「intensive "naturalistic" observation」(「自然な」観察) と呼ぶ質的調査を行うことで、家庭生活においてどのようにして言語資本の伝達が行われているのか、さらにはどのように生活において重要な資源として行使されるのかといった部分を経験的に明らかにしている[iii]。本書巻末の付録において著者自身がブルデュー理論についての解説を書いており、本書の理論的な部分はブルデュー

に大きく依っているのは明らかであるが、先に述べたようなブルデュー理論の経験的分析の不足に対して貢献をなす仕事となっている。そういった点が評価され、本書はアメリカ社会学会から文化社会学最優秀書籍賞などを受けている。

著者ラリューは教育社会学・家族社会学を専門としており、特に質的調査に基づいた研究を行っている。現在はメリーランド大学の社会学教授（二〇〇五年秋学期から一年間はスタンフォード大学行動社会科学高等教育センターの研究員を勤め、二〇〇六年秋学期よりメリーランド大学に着任）であり、著書には、*Home Advantage: Social Class and Parental Intervention in Elementary Education*、編著に *Journeys through Ethnography: Realistic Accounts of Fieldwork* がある。

それでは本書の紹介をしていこう。本書では二つの小学校に通う九歳から十歳の子どもの家庭生活を、家に泊まりこむなどして調査して得られたデータを使って書かれている。なお、調査対象を選定する際は、白人/黒人、中産階級/労働者階級/貧困層の二×三＝六カテゴリを設定し、各カテゴリから二人ずつを調査対象としている。この年齢を調査対象としたのは、両親がまだ子育てにかかりっきりになっているが、余暇時間を自律的に過ごす時期であるという理由からだと著者は述べている。調査対象となった小学校は、都会の学校である Lower Richmond と郊外の学校である Swan の二つで、Lower Richmond の生徒の多くは黒人労働者階級・貧困層の子どもである。一方 Swan は Lower Richmond のある都市の周辺の群区にあり、生徒は主に白人中産階級の家庭の子どもである。また親の学校活動への参加の度合いも大きく異なり、Swan では PTA 活動が活発に行われ、学校に対して親が意見する様子もみられるが、Lower Richmond ではそのようなことはあまりみられない。このように対称的な二つの小学校を取り上げて調査することで、階級間の子育て活動の違いを明らかにしようとしている。

続いて本書の内容についてみていこう。本書の構成は大きく三部に分かれているが、それぞれが独立しているわけではなく、記述は相互に重なり合っている。中産階級の家庭/労働者階級・貧困層の家庭を交互に取り上げ、著者が「concerted cultivation」（懸命な子育て）と呼んでいる中産階級の子育て方策と、「natural growth」（自然な成長）と呼ばれる労働者階級・貧困層の子育て方策の差異を際立たせるものになっている。まず第一部では、「日常生活の構成」として、学校外での時間の使い方について検討している。

中産階級の家庭の子どもは、ほぼ毎日何らかの課外活動の予定が入っており、過密な予定をもっていることが示される。活動内容はサッカー・野球といったスポーツが中心となっており、試合などのイベントの観戦のために、親が仕事の予定の調整に腐心している様子が描き出される。こういった課外活動には子ども一人に対しての分だけで年四〇〇〇ドルかかっているのだが、子どもは金銭に対して頓着しておらず、こういった生活状況を当然のものとして捉えている。課外活動で、「ゲームのルール」にしたがって競技することを身に付けることは、学校生活、ひいては将来の職業生活の局面に

おいても役に立つ事柄を身につけることにもなるのだが、子育てにおけるこういった作用こそ、まさに再生産の過程を示しているといえる。

続く章では、労働者階級の黒人少年、貧困層の白人少女の家庭について述べられている。彼らは中産階級の子どもとは異なり、多くの自由な時間をもっており、遊びの内容や遊び友達の選択、どう遊ぶのかといった点について自律性を与えられているし、インフォーマルな仲間集団の作り方、自分の時間をどう管理するのかといったことを学ぶことになる。しかし、フォーマルな面での戦略を学ぶことはないし、フォーマルな面での戦略を学ぶ機会となるスポーツのような課外活動に親が参加させるのは子どもからの特別な要求があるときに限られている。課外活動に対して、親は子どもの発達において決定的なものだとは考えていないためである。しかし、子どもの活動に対して親が注意をあまり払わないことは、子育てに対する無関心を示しているわけではない。子どもの創造的発達を親の責務とは考えておらず、子どもは特別なおもちゃや課外活動がなくても育っていくものだと考えているのだ。こういった労働者階級・貧困層の育児方針を筆者は「natural growth」と呼んでいる。

次に第二部では、「言語使用」の局面について検討している。中産階級の母親は、子どもがさまざまな経験を言葉で表現することの重要性を強調しており、言語表現に対する関心を示している。こういった関心から導かれる子育て方針は、子どもの語彙を増やすことや、要約の仕方、重要な細部への注目、といった能力の育成に直結することになるが、その結果子どもは、学校などの公的な状況において大人とうまくやっていくことに役立つ能力を身に付けることになり、重要なアドバンテージとなっていると著者は指摘する。親が子どもに何か指図する場面においても、労働者階級・貧困層とは違い、なぜそうさせるのかについての説明を含めて指図をするし、いくつかの選択肢の中から子どもに選ばせるという形をとっている。このような生活を通じて、親がもつ言語能力を子どもも獲得することになる。その結果、子どもが「著作権」という言葉を用いるなど、抽象的な概念ともすでに親しんでいる例が示されている。子どもに対して強権的に接しないこれら一連の「concerted cultivation」という子育て方針は、身体的・感情的に親を消耗させるが、このやり方で子どもの潜在能力を最大限引き出すことが、子育てにおける最優先事項になっているのだ。「concerted cultivation」によって身につけた言語能力は、制度的な権威（ここでは医者が例として挙がっている）とのやり取りにおいて、子どもが力関係を大人側から自分へと移行させることに成功するまでの成果をみせることになる。言語能力によって、自身の意見が他者によって評価されるという利益を得ることになるのだ。しかしながら、中産階級の親であっても、子どもの意見を聞くばかりではなく、労働者階級・貧困層の親同様、子どもを子ども扱いすることがあるのは注意しておく必要がある。

対して労働者階級・貧困層の家庭では、親を含めて会話中の文は短く、単語はシンプルである。子どもは、「何かをしろ・何かをするな」と直接的な指示を受け、それに何も言わずに従うというのが

普通のことである。指示を根拠付ける言葉を親は発しないが、指示自体が根拠となっているのだ。労働者階級・貧困層の子どもは中産階級の子どもに比べて、大人を敬う態度がみられるし、大人と子どもの境界がはっきりすることになっている。第一部でも触れられていたが、子どもは日常生活における自律性を持っていて、中産階級の子どもに比べて消耗していないし、重要な社会的能力も身に付けてはいる。しかしこういったものは学校などの世界で、中産階級の子どものもつ言語能力のような力を発揮しない。言語能力の違い―子どもだけでなく親も含めて―が制度的生活である学校生活においてどのような違いとなって現れるかが第三部で描き出されることになる。

第三部は「家族と諸制度」、特に家庭と学校制度との関係について取り扱っている。学校生活に対して、中産階級の親はしばしば介入するが、労働者階級・貧困層の親は教師やカウンセラーらにリーダーシップを発揮してもらおうとする傾向があることを示している。

中産階級の親は、教師に勉強面での子どもの取り扱い方への要求を多くしているが、その際には言語能力などの文化資本・社会資本を用いている。学校制度に介入することで子どもがうまくやっていけるように、子どもが広く価値のある能力を身に付けるように親が努力していることは、階級に基づくアドバンテージとなっている。だが、介入によってよい結果が得られるとは限らない。子どもが親の努力を意識していなおらず、むしろそれによって悩まされ、親が躍起になるほど子どもの学習意欲がそがれる場合や、親の介入が教師がよしとする行動と異なり、受け入れられずに終わってしまうような場合である。さらには、同じような社会的資源を持っていても「concerted cultivation」がうまくいくとは限らないという偶然的な要素もあると著者は述べている。

労働者階級の親も中産階級の親と同じように子どもの教育を気にしているものの、「悪いことをしないか」というような点を気にしていたり、教師にアドバイスするよりもアドバイスをもらおうとするという点で違いがみられることが示される。また、教師・学校の方針に対する反発があり、学校と家庭は分離された状態にある。労働者階級の家庭では、殴られたら殴り返せという方針や、推論に基づく指図をしても、言うことを聞かない場合は有効なやり方だとして体罰を用いる光景がみられ、学校制度とは相容れない子育て方針をとっていることが示されている。さらに親も含めて言語能力が高くないことは、中産階級が言語能力によって見えない利益を得るのとは逆に、支配的な文化に同調できず、学校でうまくやっていけないことにつながっている様子を描いている。

以上のように、質的調査に基づくデータから、文化的再生産が行われていく様子を描き出してきた著者であるが、最終章では小学校の卒業式の様子が描かれており、この先これらの子どもがどのように成長していくのかについて興味がもたれるところである。著者は追跡調査も検討しているようだが、是非やってもらいたい。ポール・ウィリスは『ハマータウンの野郎ども』で中学卒業前後の労働者階級の「野郎ども」がどのようにして労働者になっていくかを見事に

描き出したが、本書は追跡調査を行うことで、再生産過程をさらに精緻に明らかにしていける非常に有意義な第一歩であるといえる。階級間の差異への注目に比べ、人種間の差異については多くは語っていないが、そのことは本書の欠点ではなく、むしろ階級間の差異を明らかにするという点では有益な結果をもたらしているのではないだろうか。

このように優れた点をもつ本書ではあるが、気になる点を一つ挙げておく。著者が導き出した「concerted cultivation」と「natural growth」という二つの子育て類型における、自律性・創造性の位置付けに関してである。著者も指摘してはいるが「concerted cultivation」は、子どもの能力を伸ばしてやろうとする育て方ではあるが、自律性を尊重するよりは、鋳型にはめ込もうとする面も見受けられる。確かに子どもにいくらか選択の余地は残されているのだが、活動の大枠は親によって規定されており、限定的な自律性を与えられているというのが適当だろう。逆に「natural growth」は子どもが育つに任せるという育て方で、権威的なしつけを行うものの、余暇活動に対して放任的な部分は、自律性・創造性を育む面がみられる。コーンは、職業条件と子育てにおいて重視する価値に関する分析を行い、職業条件の実質的複雑性の高いほうが子育てにおいて子どもの自律的成長を重視する度合いが高いという関係がみられることを明らかにしている。中産階級のほうが自律性を重視した子育てをすると言い換えることができるが、「concerted cultivation」は自律性を育むといえるのだろうか。子どもの言語能力を育むことで、支配的な文化に親和的な人物になるということはいえるが、自律的・創造的な能力を身に付ける過程は本書では触れられていない。逆に、「natural growth」では自律性・創造性のはたらく余地が子どもに残されているとされ、新しい遊びを子どもが考え出して楽しんでいる様子が描かれているのだが、言語資本の不足などから支配的文化と親和性を持つことができないため、将来においてが発揮される余地は少ないように思われる。高く評価される価値である自律性・創造性だが、支配的文化の作法を身につけた上でなければ有用性を持ち得ないということを示しているのではないだろうか。先にも述べたように、追跡調査を行う中で、どういった過程で自律性・創造性が子どもに育まれ、発揮され、有用性を持つようになるのかを明らかにされることを期待したい。

参考文献

柴野昌山、1989、「しつけの理論－理論的枠組－」柴野昌山編『しつけの社会学』、世界思想社

小内透、1995、『再生産論を読む』東信堂

Kohn, M. L.,[1969] 1977, Class and Conformity: A Study in Values, With a Reassessment, 2nd ed., Chicago: University of Chicago Press

注

i 柴野昌山、1989、「しつけの理論—理論的枠組—」柴野昌山編『しつけの社会学』、世界思想社、p21

ii 小内透、1995、『再生産論を読む』東信堂、p60

iii intensive "naturalistic" observation については、本文八ページから十ページにかけての「THE STUDY」という節にある。調査対象者に対して、

ホックシールドが『セカンド・シフト　第二の勤務』でいうところの、「家の犬」のように調査者を扱ってもらうよう要請したと述べられている。